

全国の学生協働をつなげる － 大学図書館学生協働交流シンポジウムの取組み－

岡崎 聡志, 昌子 喜信

抄録：全国の大学図書館で活動する学生スタッフや関係教職員の交流を目的として開催しているシンポジウムの経緯を述べ、2014（平成26）年度開催の第4回シンポジウムの詳細を報告した。そして、第3回シンポジウムの事後アンケート結果を基に評価を行ったところ、シンポジウムへの参加が活動へのモチベーションの向上に効果があることを述べた。さらに、今後継続して実施していく上での課題と展望について考察した。
キーワード：学生協働, ピア・サポート, キャリア支援, 学習支援, 大学図書館

1. はじめに

近年、大学図書館では図書館業務の一端を、職員とともに、利用者でもある学生が担う学生協働活動への取組みが活発に行われている¹⁾。その活動形態は学習支援、図書館利用支援、図書館業務支援など様々であり、学生協働組織の設置主体も図書館以外の部署の場合があるなど一様ではない。しかしながら、活動内容や設置形態の違いはあっても、1) 学生の主体的な活動を通して学生の成長を促す、2) 学生の視点を業務やサービスの改善に活かす点において共通の目標が見られる。

山口・島根両県の4大学（山口大学、梅光学院大学、島根県立大学、島根大学）は、各大学で活動する学生協働スタッフが、互いに活動を報告しあい、交流することをとおして、活動をさらに発展させることを目的として「大学図書館学生協働交流シンポジウム」（以下「本シンポジウム」という。）を2011（平成23）年度から共同で開催している。回を追うごとに内容を見直すとともに参加範囲の拡大を図るなど、より有意義な交流を促すための努力を行ってきた。毎回の参加者アンケートを見ると、シンポジウムに参加することで活動へのモチベーションが向上していることが分かる。

本稿では、2014（平成26）年度開催の第4回シンポジウムの報告を中心として、これまでの経緯と意義・効果を述べ、今後の課題について考察する。

2. 背景及び経緯

本章では、大学、とりわけ大学図書館において学生協働の取組みが行われるようになった背景を述べ、本シンポジウムのこれまでの経緯を述べる。

2.1 学生協働の背景

八木澤の定義に従えば、大学図書館における学生協働は「図書館業務の一端を、職員とともに、利用

者である学生が担う活動」であり、学生スタッフが「自発的・自律的に学習支援に関与」する活動である²⁾。すなわち、学生協働は、学生が業務の一部を担うことによるキャリア形成を支援することに加えて、ピア・サポート³⁾を包摂する概念であると言える。

キャリア形成支援の面では、若者の完全失業率や非正規雇用率の高さ、無業者や早期離職者が多いことなどを背景に、若者の社会的自立・職業的自立を促し、生涯にわたるキャリア形成を支援するための様々な施策が実施されている⁴⁾。また、幼児期から高等教育までの体系的なキャリア教育の必要性が提言され⁵⁾、各教育段階でのキャリア教育が推進されている。大学教育においては、正課内の教育に加え、学生支援等正課外の活動を通じて、1人ひとりのキャリア形成を促進させる支援を行っていくことが推進されている⁶⁾。そのための取組みのひとつとして、学生協働は位置づけられるだろう。

山田は、先行研究を引きながらピア・サポートの背景を次のように整理している。我が国の大学を取り巻く環境の変化（「ユニバーサル化」「キャリア不安」「アウトカム重視」など）を背景として、学力低下問題に対し、教育の質保証システムを再構築する取組み及び青年期固有の心理社会的な発達課題への対応の中で、ピア・サポートは制度化された学生支援や専門的學生支援の窓口への橋渡しの機能として重要であると述べている⁷⁾。また、ピア・サポートの広がり背景にある大学生の心性として、専門家よりも友人や家族などの身近な援助者に対する援助要請を好む傾向にあることを挙げている⁸⁾。

大学図書館における学生協働、とりわけピア・サポートの取組みは、上記の背景を共有しつつ、大学図書館固有の文脈による要因も作用して拡大しつつあると見ることが出来る。すなわち、わが国においてもラーニング・コモンズを整備する大学図書館が

増えてきたことに伴い、大学図書館は、単位制度実質化のための授業外学修の場として、また、主体的に課題を発見して解決を図る能動的学修（アクティブ・ラーニング）の場として機能することを要請されるようになり、大学図書館における人的支援体制の一角として学生や大学院生によるピア・チュータリングの体制整備が求められるようになったことが背景としてある^{9) 10) 11)}。

2.2 本シンポジウムの経緯

本シンポジウムは、各地の大学図書館等で活動する学生、大学の教職員及び広く学生協働に興味を持つ者が集まり、情報を共有するとともに、それぞれの立場から一緒に学生協働活動について考え、意見交換することにより、学生協働活動のさらなる発展を図ることを目的として、2011（平成23）年度から開始したものである。

第1回シンポジウムは、学生協働の取組みを先行して実施していた山口大学の活動状況¹²⁾を参考にさせてもらおうと、島根大学から呼びかけて実現したものである。山口・島根両県内で同様の取組みを行っていた梅光学院大学と島根県立大学（浜田キャンパス・松江キャンパス）にも参加を呼びかけて4大学5図書館にて開催した。以後、第2回シンポジウムまでは、この5図書館による事例報告及びパネルディスカッションの形をとった。

本シンポジウムは、第1回目から一貫して、学生スタッフ同士、関係教職員同士、また学生スタッフと教職員が交流することに主眼を置いて実施している。本シンポジウムの名称に、あえて「交流」の2文字を入れているのはそのためである。交流がより深まるように、第3回シンポジウムでは、より交流を意識したプログラムとなるよう見直しを行った。参加者全員が共通のテーマで話合いに参加できるようワールド・カフェを取り入れたことと、発表者と身近な距離で質疑応答できるポスターセッションを設けたことが見直しの要点である。

また、第3回からは、これまでの5図書館以外にも発表者を公募することにし、全国に参加を呼びかけた。その結果、中国・四国地区を中心に関東地区からも参加を得て、事例報告に6大学7図書館、ポスターセッションに6大学からの参加があった。さらに、大学図書館の学生協働をテーマとしたシンポジウムが他になかったことから、より広い範囲で交流を行う意義があると考え、本シンポジウムを中国四国地区大学図書館協議会の事業として位置付けていただくよう働きかけ、同協議会の2014（平成26）年度総会において承認された。

以下に、第1回から第3回までの本シンポジウムの開催概要を示す（表1）。各回のプログラム、発表の動画、及びプレゼン資料等は山口大学図書館のWebサイトから公開している¹³⁾。

表1 過去の本シンポジウムの開催概要

回	開催年月	会場	参加者
1	2011（平成23）年9月	山口大学 吉田キャンパス	72
2	2012（平成24）年9月	島根県立大学 浜田キャンパス	82
3	2013（平成25）年9月	島根大学 松江キャンパス	98

3. 第4回（2014年度）シンポジウム

本章では、第4回シンポジウムの実施内容を報告する。第4回は、2014（平成26）年8月21日～22日、山口大学吉田キャンパスを会場として開催した。

今回のシンポジウムでは、開催校の学生スタッフの話し合いの結果をもとに、学生協働という活動について改めて考え、次のステップへと繋げていく機会となること、あわせて、これから学生協働の取組みをスタートさせようと考えている大学の教職員も一緒に学生協働について考える機会となることを期待して、今回のテーマとプログラムを設定した（表2）。ポスターセッションとワールド・カフェを取り入れ、対話や交流を基本とした双方向のコミュニケーションを重視している。

表2 第4回のプログラム

1日目 2014（平成26）年8月21日	
13：00-13：10	開会の挨拶
13：10-14：10	基調講演 「キャリアから考える学生協働」
14：10-14：40	休憩・会場移動
14：40-15：00	アイスブレイク（レクリエーション）
15：00-16：50	ポスターセッション テーマ1「私たちの考える図書館づくり」 テーマ2「活動を通して得られたこと」 テーマ3「各大学の学生協働の特色」
16：50-17：00	休憩・会場移動
17：00-17：50	図書館見学
18：00-19：30	交流会
2日目 2014（平成26）年8月22日	
9：00-11：30	ワールド・カフェ 「学生協働は利用者の役に立っているのか？」
11：35-11：45	閉会の挨拶
11：45-12：15	アンケート記入・休憩・会場移動
12：15-13：45	事例報告及び意見交換

その結果、全国 28 大学から 143 名の学生と教職員が参加する大規模な交流・情報交換の場となった。これは、過去 3 回の開催実績と積極的な広報により、「学生との協働に取り組む大学との交流を通して、学生協働のさらなる発展を目指す」という本シンポジウムの趣旨が、広く理解されてきたと考えられると同時に、学生協働に関する情報収集の機会として活用したいという要求に合致したからであると思われる。

次に、表 2 のプログラムの流れに沿って、実施内容の詳細を述べる。なお、当日の様子は、Twitter においてハッシュタグ「# 学生協働シンポ」を付与されたツイートを中心に、Togetter にまとめている¹⁴⁾。

3.1 基調講演「キャリアから考える学生協働」

「キャリアから考える学生協働」と題して、平尾元彦教授（山口大学大学教育機構学生支援センター）が基調講演を行った（写真 1）。平尾教授は、山口大学でキャリア教育及び就職支援を担当している。



写真 1 基調講演を行う平尾教授

平尾教授は、学生協働を「生きる力・働く力を育む」という観点から捉え、「変化」「主体性」「理念」の 3 つをキーワードとして講演を進めた。

そのなかで、学生協働には、「図書館マネジメントへの参画」と「キャリアを学び育む場」という 2 つの意義があり、達成すべき明確な課題に対して作業分担をするのではなく、達成すべき課題や解決方法について一緒に考えることで、体験から学び、キャリアの力を高めることができると述べた。

講演の最後には、学生へ向けて、「興味を広く持ち、変化に対応するだけでなく変化を自らつくっていく力を身につけてほしい」というメッセージが送られた（図 1）。

変化の激しい時代だからこそ、
変化に対応し、
変化を自らつくっていく。
そんな若者が求められています。

学生協働は、
まさにその力が身につく場です。

図 1 基調講演のスライド

3.2 ポスターセッション

第 3 回シンポジウムに続いて、今回もポスターセッションを取り入れた。

ポスターセッションは、単に自分たちの団体が行っている活動を知ってもらうだけでなく、発表者と聴講者の距離が近いと、活発な質疑応答やアドバイスをもらうことが期待でき、より交流を深め、お互いの活動の参考にしやすいという利点がある。

今回のポスターセッションの発表テーマは、「私たちの考える図書館づくり」「活動を通して得られたこと」「各大学の学生協働の特色」の 3 つである。ポスター掲示のみを含む 10 大学 13 団体が発表をした（表 3）。会場では、各団体の取組みに対する質疑応答や普段の活動における疑問などについて活発な意見交換が見られた（写真 2）。

表 3 テーマごとの発表団体

テーマ 1 「私たちの考える図書館づくり」
島根県立大学浜田キャンパスメディアセンター 山口大学総合図書館 徳島大学附属図書館ライブラリーワークショップ 愛媛大学図書館 ※掲示のみ
テーマ 2 「活動を通して得られたこと」
岩手県立大学メディアセンター 島根大学附属図書館
テーマ 3 「各大学の学生協働の特色」
島根県立大学短期大学部松江キャンパス図書館 山口大学医学部図書館 梅光女学院大学図書館 下関短期大学図書館 ※掲示のみ 徳島大学附属図書館学びサポート企画部 九州大学附属図書館 九州産業大学図書館



写真2 ポスターセッション

以下に、ポスターセッションの際に行ったアンケートを参考に、筆者が各テーマから1団体ずつ選んだポスターとそれらに寄せられたコメントを掲載する。

紙幅の都合上、ポスターの内容を読みとめることは難しいと思われるが、ご容赦いただきたい。

テーマ1 「私たちの考える図書館づくり」

徳島大学附属図書館ライブラリーワークショップ (図2)



図2 徳島大学附属図書館ライブラリーワークショップのポスター

【コメント】

- ・読書会を開催している所は少なくないが、同じ作品の小説と映画を比較して意見を言い合うのはユニークだと思う。
- ・図書館をより良くするために活動していることはもちろん、ポスター等の配布物も工夫していて、手にとってみたくなったから。
- ・図書館に自分だけの展示スペースを作っていたり、新聞にリレー小説を載せたりなど、面白い活動をしているなどと思ったから。

テーマ2 「活動を通して得られたこと」

岩手県立大学メディアセンター (図3)



図3 岩手県立大学メディアセンターのポスター

【コメント】

- ・説明されている方の活動への熱い思いが伝わってきました。
- ・館内スタンプラリーやクロスワードなど図書館内にどのようなものがあるかなどの広報がされて興味深かった。
- ・専門図書館ならではの資料の紹介があっておもしろかったです。

テーマ3 「各大学の学生協働の特色」

九州大学附属図書館 (図4)。



図4 九州大学附属図書館のポスター

【コメント】

- ・学習相談, Cute Guides など, 学生の専門性を活かした取組みをしている。TA という形ではなく, それぞれの専門性を生かして講習会などを開いているのがすごい。
- ・院生 only の専門性を活かした学習サポートが興味深い。方針などもしっかりしている。取組みが色々あって, 「いいなー!」と思うものが一番多かった。話し方もわかりやすく, 質問も丁寧に答えていてよかった。
- ・各分野で書かれたガイドがとても読みやすくわかりやすく興味をひかれました。

3.3 図書館見学

図書館見学では, 見学者を5グループに分け, 適宜, 質疑応答を交えながら, 約50分で山口大学総合図書館を回った(写真3)。

学生協働による資料展示や学生協働の発案によりレイアウト変更したスペースなど, 学生協働と関わりがあるところでは, とくに活発な質疑応答が行われた。アカデミック・フォレスト(ラーニング・コモンズ), 学生が運営するカフェ¹⁵⁾, 増築した書庫棟及び大雨による水損被害¹⁶⁾の対応・対策についても多くの質問があった。



写真3 図書館見学

3.4 交流会

1日目の終わりには交流会を行い, さらに親睦を深めた。交流会のなかで, 各大学の活動風景のライドを上映することにより, 会話の糸口になるとともに, ポスターセッションに盛り込まれなかった普段の活動を知ることができた(写真4)。

また, 山口県での開催をより楽しんでもらうため, 会場には, 山口県のお土産や特産品の試食を用意し, 多くの参加者が興味深そうに手に取る姿が見受けられた。



写真4 交流会

3.5 ワールド・カフェ

第3回シンポジウムに続いて, 今回もワールド・カフェを取り入れた。

ワールド・カフェとは, メンバーの組合せを変えながら, 小グループで話し合いを続けることにより, あたかも参加者全員が話し合っているような効果が得られる会話の手法である¹⁷⁾。

1日目の基調講演やポスターセッションを聴講して, そのまま終わりとするのではなく, 初対面同士でもすぐに打ち解け, 安心して対話をする環境をつくることで, 参加者1人ひとりが自分の意見を語

り、たくさんの参加者の様々な意見を聞くことができる機会を提供することが狙いである。また、自分の意見に対する反応を知ることができるのもポイントである。

今回のワールド・カフェでは、テーマ（問い）を「学生協働は利用者の役に立っているのか？」として、学生、教職員の混合14グループA～N（各グループ7～8人）に分かれ、1ラウンド30分で3ラウンドを行った。山口大学大学教育機構大学教育センターの林透准教授がコーディネーターを務めた。

基調講演やポスターセッションの内容を踏まえ、各グループで活発な対話が行われた（写真5）。最後の全体会では、3つのグループに発表してもらい、各グループの対話を共有した（写真6）。



写真5 ワールド・カフェの対話



写真6 ワールド・カフェの全体会

以下に、参考として、テーブルホストの学生がまとめた3グループの対話の概要を示す。

[Bグループ]

学生協働である強みは学生視点と職員視点の2つの視点を取り入れることができる点。片方からしか見えていないこともあるし、両方の視点があること

によって改善されることもある。その視点の違いを活かして図書館を利用者にとって過ごしやすい空間に変えていることは役に立っていると思う。広報に力をいれ、多くの人に自分たちの活動を認識してもらうことで利用者の役に立っていることに自信を持てるようになるのではないだろうか。

[Gグループ]

テーマの「利用者」とは誰を指すのかという点から議論が始まり、その利用者が学生協働である私たちのことを指すのならキャリア教育の面で役に立っているといえるのではないかと、また一般の利用者のことを指すのなら役に立っているかをはかる指標が必要だという話になった。そして指標としてはアンケートなどを定期的に行ったり、友人から図書館についての話を聞いてみるなどの意見が出た。

[Iグループ]

テーマを「学生協働」「利用者」「役立つ」の3つに分けて話し合いを行った。学生協働自体は、利用者でもある学生にキャリア教育として役に立っているということ、しかし、その他の利用者の役に立っているかは分かりづらく、職員との連携も必要と考えた。また、学生協働と職員だけでなく、先生の協力を得られれば、より多くの利用者の役に立てるのではないかとという提案も出た。

3.6 事例報告会及び意見交換会

今回のシンポジウムの全体プログラム終了後、教職員を対象として、総合図書館内りぶカフェにおいて事例報告及び意見交換会を実施した（写真7）。

学生協働の活動を支える教職員の視点からの課題やその解決策・アドバイス、学生たちとの関わり方、ベストプラクティスなどを共有することが狙いである。学生協働に関わる現場の教職員の情報を交



写真7 事例報告及び意見交換会

換する機会として今回初めて設定したが、12 大学 44 名が参加し、関心の高さがうかがわれた。

会は昼食をとりながらの進行で、主催 4 大学による事例報告の後、全体での意見交換を行った。意見交換では、苦勞している点や業務の中で実際に費やしている時間、職員の体制の問題など、現場で日々学生と向き合い、試行錯誤している職員ならではの意見も聞かれた。なお、食後には、りぶカフェ「栞」¹⁸⁾ を運営する学生団体による飲み物のサービスが行われた。

4. 評価と課題—第 3 回シンポジウムの事後アンケートの結果から—

本章では、第 3 回シンポジウム開催後に参加者に対して実施した事後アンケートの結果¹⁹⁾ を基に、本シンポジウムの評価と課題について述べる。

事後アンケートは、シンポジウムに参加したことがその後の活動にどのように影響したかを知るために、第 3 回シンポジウムで初めて実施したものである。シンポジウムの約 3 ヶ月後に、参加した学生と参加機関のそれぞれに対して Web 上のアンケートシステムを利用して実施した。学生に対しては、活動に対する意識の変化や活動内容の変化について尋ね、参加機関に対しては、シンポジウムを今後継続して実施するにあたっての課題について各機関の意向を尋ねた。回答率は、参加学生 42%、参加機関 73% だった

4.1 参加学生への事後アンケート結果

参加した学生に対するアンケートの内、次の 3 点について取り上げる。

① 「本シンポジウムに参加してどのような点が役立ったか」

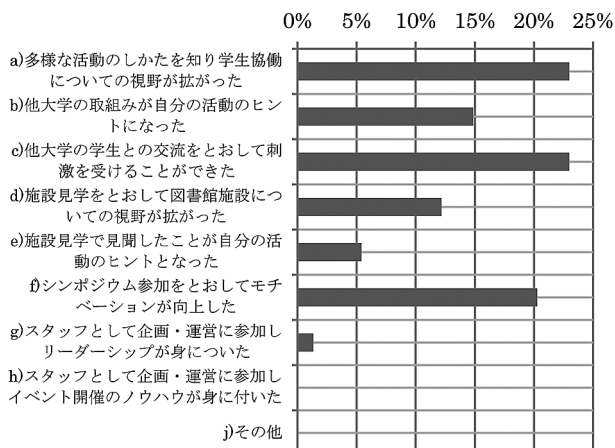


図 5 本シンポジウムに参加して役立った点

本シンポジウムに参加して役立った点について複

数回答で質問した。他大学の取組み状況を知ること、視野が広がった (図 5 の a)、活動のヒントを得た (図 5 の b) とする回答が多く、また、他大学の学生との交流をおおして刺激を受けた (図 5 の c) とする回答が多かった。これらのことをとおして、活動へのモチベーションの向上につながっている (図 5 の f) と考えられる。

② 「本シンポジウムに参加した後、活動がどのように変化したか」

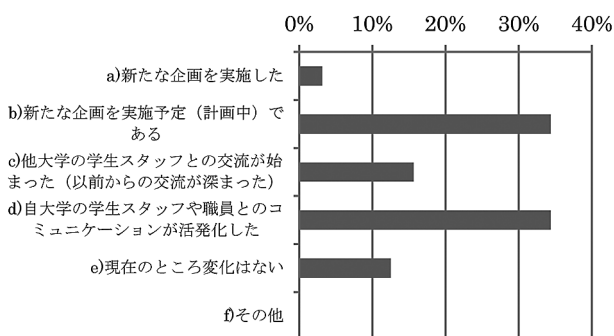


図 6 シンポジウム参加後に活動が変化したか

本シンポジウムに参加したことによって、その後の活動がどのように変化したかを複数回答で質問した。

新たな企画を計画中である (図 6 の b) とする回答が多かったのは、前項の質問に対する回答で他大学の活動を知ることによって視野が広がり、活動へのヒントとなったとする回答が多かったことに呼応するもので、シンポジウムで得たヒントを具体的な企画段階まで結び付けていることがうかがえる。

また、自大学の学生スタッフや職員とのコミュニケーションが活発化した (図 6 の d) とする回答が多かった。シンポジウムへの参加をおおして、活動へのモチベーションが上がり、学生スタッフ同士や職員との間でコミュニケーションが活発化するという好循環を生んでいると言える。このことは、次のような自由記述からも読みとれる。

・「自分から話しかける、という行為が以前よりも気兼ねなくできるようになりました。初対面の相手から意見を聞き、聞いた意見を自分の頭でどういうことなのかを理解し、また他の人が意見を言いやすいように話をふるのが、今回のシンポジウムでとても学べたように思います。」

・「意見や疑問を言う際、自分の中でもう一度反芻し「つまり何が言いたいのか、どうしたいのか」を明確にしてから発言するように気を付けています。第 3 回シンポジウムで行われたワールド・カフェ企画での経験が大きかったです。」

③ 「来年も本シンポジウムに参加したいか」

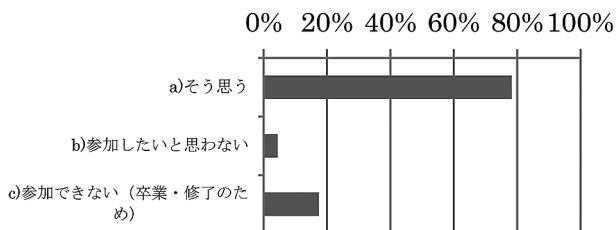


図7 来年も本シンポジウムに参加したいか

来年も本シンポジウムに参加したいかどうかを質問した。卒論や他の活動のために時間につくれない、卒業・修了のために参加できない、と答えた以外は80%近くが来年も本シンポジウムに参加したいと回答しており、満足度の高さがうかがえる(図7)。

シンポジウムに参加することによって、活動のヒントを得るだけでなく、他大学の学生や職員との交流をとおして学び、成長していることが、次のような自由記述からうかがえる。

- ・「少しずつ、前回とは違う自分を感じることができるといことと、普段お会いすることが難しい他大学の職員さんや学生と交流・再開できるから というのが、次回も参加したいと思える大きな理由のひとつです。」
- ・「私は例年シンポジウムに参加していますが、参加する度に図書委員としてだけでなく、人間的にも成長していると感じているので、来年のシンポジウムにも参加したいと考えています。」

4.2 参加機関への事後アンケート結果

参加機関に対するアンケートでは、主に本シンポジウムに参加するにあたっての課題や継続的に実施していくにあたっての課題について質問した。ここでは、次の3点を取り上げる。なお、表中の数値はすべて回答した機関数である。

① 「本シンポジウム参加にあたっての課題は何か」

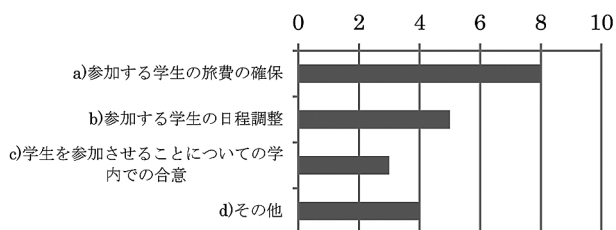


図8 本シンポジウム参加にあたっての課題

本シンポジウムに参加するにあたっての課題を複数回答で質問した。参加する学生の旅費の確保(8機関)、学生の日程調整(5機関)を課題とする機関が多かった(図8)。その他の課題として、規模

の小さな大学では、通常開館しながら学生の引率を誰が行うか、という課題も指摘されている。

② 「本シンポジウムの開催範囲について」

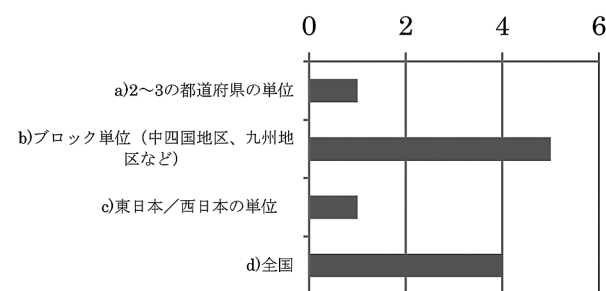


図9 シンポジウムの開催範囲

本シンポジウムの開催範囲(主催大学として企画・実施する大学の範囲)について質問した。中国・四国地区や九州地区などのブロック単位での開催を適当とする回答(5機関)が多く、全国(4機関)がそれに次いで多くなっている(図9)。開催範囲を狭くし過ぎると参加大学が固定化してマンネリ化を招く恐れがあり、開催範囲を広げ過ぎると開催地が遠方になった時に移動に要する時間が増大し、旅費の負担が大きくなるなど、学生が参加する際の阻害要因となりうることを示唆される。一方で、アンケート実施時点で同様のシンポジウムが他になかったことから、全国を開催範囲とすることへの期待も読みとれる。

③ 「本シンポジウム開催の課題について」

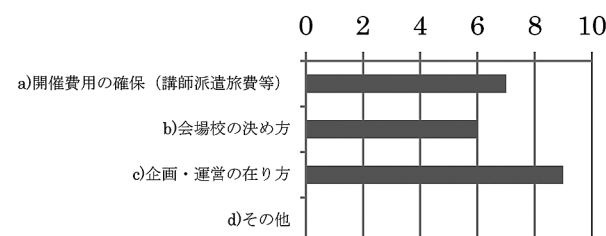


図10 本シンポジウム開催の課題について

本シンポジウムを今後継続して開催するにあたっての課題について質問した。企画・運営の在り方(9機関)、開催費用の確保(7機関)、会場校の決め方(6機関)の順となっている(図10)。自由記述では、全体会と分科会に分けるなどの運営上の工夫の必要や、小規模校では開催が困難なことから一部の大学に開催校が固定化してしまう恐れ、交流が進んだ結果として活動が似通ってしまう恐れなども指摘された。

4.3 評価と課題

参加学生への事後アンケート結果からは、本シン

ポジウムに参加することで、各大学における学生協働の活動を活性化させることにつながっていることがうかがえ、本シンポジウムの目的を達成していると評価できる。また、シンポジウムでの発表や他大学の学生、職員との交流をとおして学び、人間的にも成長していることがうかがえることから、交流に主眼をおいた本シンポジウムの意義を評価できよう。

本シンポジウムは、前述のとおり2014（平成26）年度開催の第4回から中国四国地区大学図書館協議会の事業として実施することになった。今後、中国・四国地区のブロック単位で継続して本シンポジウムを開催するにあたっての課題を、参加機関への事後アンケート結果も踏まえて整理してみたい。

第1に、経常的な予算の確保が必要である。シンポジウムを企画・実施する主催機関にとっては、シンポジウムの運営のための予算を安定的に確保することが重要であり、事業の実施母体となる同協議会の構成館に対して、本シンポジウムの意義を訴えていく必要がある。また、シンポジウムに参加する機関にとっては、参加する学生や職員の旅費の確保が必要であり、各大学の学内の関係部署に対して、学生を本シンポジウムに参加させることの意義を訴えていく必要がある。

第2に、開催校の決め方を含むシンポジウムの企画・運営の在り方についてである。第4回までは、4大学主催により4大学の中で持ち回り開催し、企画・運営も4大学の学生・職員による実行委員会が担ってきた。今後、本シンポジウムを中国・四国地区ブロック内で継続して実施していくにあたっては、開催校の決め方や企画・運営の在り方を検討していかなければならない。

5. 今後の展望—まとめにかえて—

大学図書館における学生協働の取組みが全国的な広がりを見せつつある中で、大学間の交流を目的とした本シンポジウムは一定の成果を上げてきたと言える。本シンポジウムが全国から参加者を集めるようになるとともに、2014（平成26）年度には東京地区で同様のワークショップが開催されるなど²⁰⁾、交流の輪も全国に広がりつつある。本章では、今後の展望として2つの点を取り上げて、まとめとした。

今後、本シンポジウムは中国四国地区大学図書館協議会の取組みとして、中国・四国地区のブロック内で開催地を毎年変えながら、参加は全国から募り開催していくことになろう。前述のように、東京地区においても、お茶の水女子大学を中心に同様の取

組みが始まったところである²¹⁾。全国の他のブロックにおいても同様の交流事業が開催されるようになれば、地理的に近い場所で開催されることから経費的にも参加への敷居は低くなり、参加を促すことにつながるであろう。参加範囲をブロック内に限定せずオープンにしておけば、ブロックを越えた交流も可能となる。このように、全国の学生協働活動が交流・活性化する機会を創出することで、参加者の成長と学生協働の発展につながることを期待される。

2点目は、学内における学生協働活動の交流の展開である。日本学生支援機構の2010（平成22）年度の調査によれば、国立大学で約57%、公立大学で約28%、私立大学で約33%の大学がピア・サポートを実施している²²⁾。サポートの内容は、学生生活支援や学習サポート、履修相談など様々であるが、大学内においてはピア・サポートを始めとする学生協働の活動が既に広く行われるようになっていえる。2014（平成26）年度からは、文部科学省による経済的に修学が困難な学生を対象とした学内ワークスタディの支援が、国立大学にも拡大されることになり、教職員が学生と協働する局面がより一層増えることとなった。

このように大学の構成員（学生・教員・職員）が一緒になって、学生の正課外学習を支援する動きは、図書館のみならず、大学の随所で行われているが、十分に効果を発揮するにはさらに工夫が必要であろう。

学生と教職員が「図書館」という1つの舞台上に立って、図書館サービスや学習支援の在り方を考えたり、学生協働活動を展開していく上での課題や悩みを共有するなど、幅広く交流できる本シンポジウムは、各大学における学生協働の取組みを牽引するような役割を果たし得るのではないだろうか。先行している大学図書館の学生協働が、学内の様々な学生協働活動を牽引し、連携、協働、交流を深めることができれば、学内における学生の生活支援、学習・教育支援の面において、より効果を発揮できるものと思われる。学生と教職員が共に考え、共に活動し、共に成長していける豊かな土壌を育むことができれば、より大きな成果が生まれるのではないかと期待している。

本シンポジウムがその起爆剤として機能するようさらなる展開を図りたい。

注・参考文献

- 1) 八木澤ちひろ. 大学図書館における学生協働について：学生協働まっぶの事例から. カレントアウェアネス. 2013, no. 316, p.10-14., <http://current.ndl.go.jp/cal795>, (参照 2014-09-21).
- 2) 前掲 1)
- 3) ピア・サポートとは「学生生活上で支援（援助）を必要としている学生に対し、仲間である学生同士で気軽に相談に応じ、手助けを行う制度」のことである。
日本学生支援機構. 「大学，短期大学，高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査について」調査報告. 日本学生支援機構. (オンライン), http://www.jasso.go.jp/gakusei_plan/documents/outline.pdf, (参照 2014-09-03).
- 4) 一例として、次のような事業を挙げることができる。
文部科学省. “地域キャリア教育支援協議会設置促進事業”. 文部科学省. (オンライン), http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/1339053.htm, (参照 2014-10-08).
- 5) 文部科学省中央教育審議会. “今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）平成 23 年 1 月 31 日”. 文部科学省. (オンライン), http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm, (参照 2014-10-08).
- 6) 前掲 5)
- 7) 山田剛史. 特集, ピア・サポート：ピア・サポートによって拓かれる大学教育の新たな可能性. 大学と学生., 2010, no.87, p.6-15., http://www.jasso.go.jp/gakusei_plan/documents/daigaku561_04.pdf, (参照 2014-09-21).
- 8) 前掲 7) 「こうした広がり背景にある学生心性として、大学生は同世代との親密性が発達課題となり、友人からのサポートが他の資源と比べて最も高い時期であること（嶋, 1992）や、大学生の援助要請の特徴として、専門家よりも友人や家族などの身近な援助者に対する援助要請を好む傾向があるということ（木村, 2007）などが挙げられる。」
- 9) 文部科学省中央教育審議会. “新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて：生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（答申）平成 24 年 8 月 28 日”. 文部科学省. (オンライン), http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf, (参照 2014-09-03).
- 10) 文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会. “大学図書館の整備について（審議のまとめ）平成 22 年 12 月：変革する大学にあって求められる大学図書館像”. 文部科学省. (オンライン), <http://www.janul.jp/jdocuments/mext/singi201012.pdf>, (参照 2014-09-03).
- 11) 文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会学術情報委員会. “学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）平成 25 年 8 月”. 文部科学省. (オンライン), http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/08/21/1338889_1.pdf, (参照 2014-09-03).
- 12) 日高友江, 岡田隆. 学生協働（Library Assistant）によって変わる図書館サービス：山口大学図書館の実践. 大学図書館研究. 2009, p.9-14., <http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/yunoca/handle/2010010160>, (参照 2014-09-21).
- 13) 山口大学図書館学生協働. “山口大学図書館学生協働”. 山口大学図書館. (オンライン), <http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/blog/>, (参照 2014-09-03).
- 14) 山口大学図書館学生協働 WG. “第 4 回大学図書館学生協働交流シンポジウム”. Together. 2014, <http://together.com/li/709798>, (参照 2014-09-21).
- 15) 岡崎聡志. “学生主体の憩いの場：山口大学総合図書館「りぶカフェ」”. カレントアウェアネス-E. <http://current.ndl.go.jp/e1533>, (参照 2014-09-21).
- 16) 山口大学総合図書館. “番外編：水害からの復旧”. 山口大学総合図書館改修日記. 2013. <http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/repair-blog/index.php?e=47>, (参照 2014-09-21).
- 17) 香取一昭, 大川恒. ワールド・カフェをやろう！：会話がつながり、世界がつながる. 日本経済新聞出版社, 2009, 231p.
- 18) 前掲 15)
- 19) 学生協働交流シンポジウム実行委員会. “大学図書館の学生協働交流シンポジウム（第 3 回）報告書”. 学生協働交流シンポジウム実行委員会. (オンライン), <http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/LA/sympo2013/pdf/2013Report.pdf>, (参照 2014-10-08).
- 20) お茶の水女子大学附属図書館. “学生協働ワークショップ in 東京 2014”. お茶の水女子大学附属図書館. (オンライン), <http://www.lib.ocha.ac.jp/lib-student2014.html>, (参照 2014-11-5).
- 21) 前掲 20)
- 22) 独立行政法人日本学生支援機構. “「大学，短期大学，高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査（平成 22 年度）」集計報告（単純集計）2011（平成 23）年 6 月”. (オンライン), http://www.jasso.go.jp/gakusei_plan/documents/torikumi_chousa.pdf, (参照 2014-11-5).

< 2014.11.21 受理 おかざき さとし 山口大学総合図書館情報サービス係, しょうじ よしのぶ 島根大学附属図書館企画・整備グループリーダー >

Satoshi OKAZAKI, Yoshinobu SHOJI

Linking student collaboration in Japan : The Symposium on student collaboration in university libraries

Abstract : This paper begins with the history of a symposium developed to improve collaboration between student assistants and their supervisors in university libraries across Japan, and provides details about the 4th symposium that was held in 2014. Based on the survey results received after the 3rd symposium, the authors found that participation in the symposium resulted in increased motivation to collaborate. In addition, the authors consider issues and prospects relating to continuing the symposium in the future.

Keywords : student collaboration / peer support / career services / learning support services / university libraries